

聖書：Iサムエル20：1～42

説教題：真実を尽くして

日時：2016年12月11日（夕拝）

聖書に記されている最も美しい友情関係は誰と誰の関係かと問われたら、少なくともかなりの上位に上がるのがダビデとヨナタンの関係ではないでしょうか。その二人の関係が最もドラマティックに描かれているのが、この1サムエル20章ではないかと思えます。二人は心の友でした。彼らは互いに愛し合い、尊敬し合い、そこには平和がありました。しかし二人の間には難しい状況がありました。それはヨナタンの父サウルのダビデに対する病的なまでの嫉みです。前の19章でダビデはサウルに命を付け狙われ、遠くの町まで逃げましたが、そこにもサウルは追いかけて来ました。ダビデは今日の章でラマのナヨテから戻って来てヨナタンに訴えます。「自分はサウルに殺されようとしている。だからあなたの父の真意を確かめて欲しい」と。一方のヨナタンはそんなことはないと言います。2節：「絶対にそんなことはありません。あなたが殺されるはずはありません。そうです。私の父は、事の大小を問わず、私の耳に入れないでするようなことはありません。どうして父が、このことを私に隠さなければならないでしょう。そんなことはありません。」ヨナタンも前の19章冒頭では、父サウルがダビデを殺害しようと考えていたことを知りました。しかしヨナタンの説得を受けてサウルは19章6節で主の名によって誓いました。「主は生きておられる。あれは殺されることはない。」と。だからサウルはもうダビデ殺害の思いを抱いているはずはないとヨナタンは考えていたのでしょう。しかし彼はダビデの真剣な訴えに耳を傾けます。そして二人はここで新たな約束を交わします。

内容はこうです。まずヨナタンが父サウルの思いを探る。そしてその結果がどうであれ、必ずダビデに知らせる。13節でヨナタンは言います。「もし父が、あなたに害を加えようと思っているのに、それをあなたの耳に入れず、あなたを無事に逃がしてあげなかったら、主がこのヨナタンを幾重にも罰せられるように。」これがヨナタンが示すべき真実です。では一方のダビデが示すべき真実は何でしょうか。それは14～15節にあります。ヨナタンはダビデが将来、王になることを確信しています。その日が来た時、「主の恵みを私に施して下さい。」「あなたの恵みをとこしえに私の家から断たないでください。」とヨナタンは願います。これはどういうことでしょうか。一般的に新しい王家が確立されると、それまでの王家は根絶やしにされます。安定した基盤を築くために

ライバルとなり得る危険分子は滅ぼし尽くされるのです。しかしその日に私の家に恵みを施してくださいとヨナタンは言います。ここで「恵み」と訳されている言葉は、8節でダビデが使った「真実」と同じです。これはヘブル語のヘセドという言葉で、新改訳では他に「いつくしみ」「誠実」などとも訳されています。ダビデは8節で真実を尽くしてくれるようにとヨナタンに願いました。そしてヨナタンもここで真実を尽くしてくださいとダビデに願ったわけです。果たして二人はこの真実をお互いに対して貫き通すのでしょうか。

この二人の約束は小さな事柄ではなく、互いの命がかかった約束でした。もし相手が真実を尽くさなかったから、自分は欺かれてよみの世界、死後の世界へ落ちて行かなければなりません。人間的に相手を疑い出したらきりがありません。たとえばダビデの側から見るとどうでしょうか。ヨナタンは次の王になれる存在です。彼は口では「ダビデこそ次の王になる人だ」と言っていますが、ドサクサに紛れてダビデを出し抜くこともできます。情報は全部、彼が握っているのですから。ですから不都合なことはダビデに知らせず、自分に王座が回って来るように仕組むことも可能です。あるいはヨナタンは途中でサウルのプレッシャーに負けるかもしれません。サウルの側に付かず、ダビデに味方したなら、自分の命が危なくなります。そのため、ダビデには悪いがと言って目をつぶることだってあり得なくはない。あるいはサウルの心を探っている内に親子の情に強く引かれてしまうかもしれません。あるいはサウルの本当の思いを知って激しいショックを受け、ダビデに告げることをためらうかもしれません。いずれであれ、もしヨナタンが真実でない行動を取ったらダビデの命は終わりです。一方、ヨナタンの立場から見たらどうでしょうか。今こちらが真実を尽くしても、将来立場が逆転した時、彼は私のことを忘れるかもしれない。自分の政権の基盤確立にだけ思いが行って私の家を顧みてくれないかもしれない。助けてもらう時だけ助けてもらって、偉くなった後は知らんぷり。しかし二人は互いの言葉に信頼し合います。そして内容が内容だけに、ここには何度も「誓った」という言葉が出てきます。

しかし大事なことはどんなに立派な誓いをしたかということではなく、その誓いを守ったのか、相手に真実を尽くしたのかどうかということでしょう。サウルは一日目の食事の席ではダビデの欠席に怒りませんでした。二日目に怒りを爆発させます。ヨナタンは32節で「なぜ、あの人は殺されなければならないのですか。あの人が何をしたのですか。」と父に問いますが、サウルは何とヨナタンに対しても槍を投げ付けて

殺そうとします。この時、ヨナタンはサウルが本気でダビデを殺そうと決心していることをはっきり知りました。これはヨナタンにとって何という心の痛みだったのでしょうか。そうでないことを願っていたのに、父は本当にダビデを殺そうとしている。そのことに激しいショックを覚え、また怒りを覚える。そしてダビデのこれからの将来を思うと本当に悲しい。最も願わない、人間的に最悪の事態となったのです。

このような悲しみ・落胆・怒りといった状況の中で、ダビデとヨナタンの友情が輝きます。35 節以降でヨナタンは打ち合わせた時刻に小さい子どもと野原へ出て行きます。そして子どもの向こうに矢を放ち、「矢は、おまえより、もっと向こうではないのか。」と叫びます。さらに 38 節では「早く。逃げ。止まってはいけない。」と叫びます。これは事態が非常に緊迫しているというメッセージを伝えるものだったでしょう。またこれはそれほどダビデの身の安全を真剣に案じているヨナタンの心の表れでもあります。ダビデはこれを聞いて、地にひれ伏し、三度礼をしました。彼はヨナタンのしてくれたことに本当に感謝だったのです。ヨナタンがしてくれたことは、ある意味で信じられないようなことでした。ダビデをこのように助けることは、サウルが言うように自分をはずかしめることでした。しかしヨナタンは神のみこころに従って、自分を 2 番目、3 番目の位置に置き、このように仕えてくれた。二人は抱き合って泣きましたが、ダビデが一層激しく泣いたのも良く分かります。それはヨナタンのこのようなたぐいまれなる愛と真実、いつくしみと誠実に深く感謝・感動したからです。

ヨナタンは 42 節で言います。「では、安心して行きなさい。私たちふたりは、『主が、私とあなた、また、私の子孫とあなたの子孫との間の永遠の証人です。』と言って、主の御名によって誓ったのです。」二人を包む状況は考え得る最悪の状況でした。最も残念で悲しい結果が彼らの前にありました。しかしそんな中、この章最後の言葉には大いなる慰めが満ちているのではないのでしょうか。彼らは暗雲たちこめる将来に向かって神に信頼して行くしかありません。しかし、信頼し得るのは神お一人だけではないことがここに示されています。ダビデはヨナタンを信頼し、ヨナタンはダビデを心から信頼して生きて行くことができる！今後二人は会えないかもしれません。しかし主が共にいてそれぞれの歩みを導いて下さるばかりか、お互いは離れた所にあってもお互いへの真実をもって生活して行く。そのような心から信頼できる友がいることは、彼らにとって何という慰め、何という支えだったのでしょうか！これは決して口先だけのことではなかったことが、このあと示されて行きます。23 章 16 節を見ると、サウルがダビデを追い

かける中、ヨナタンは短時間、ダビデに会うことができ、彼を力づけたと出て来ます。彼の真実が変らないことがそこでもあかしされます。そしてさらに後の2サムエル記9章に記されますが、ダビデは王座に着いた時、確かにヨナタンに真実を尽くしました。その時、すでにヨナタンは天に召されていますが、ダビデは彼の家で残っていた者、メフィボシェテを大切に彼の家への真実を忘れなかったのです。

ここに今日の章のメッセージがあるのではないのでしょうか。彼らは大なる失望、落胆、困難の中へと追いやられました。その中で主なる神に信頼して歩いて行くのはもちろんのことです。しかし主に信頼すると共に人にも信頼することができる！この世界には心から信頼できる真実な神がおられるだけでなく、心から信頼できる真実な友もいる！生まれながら自己中心的な性質を持つ私たちは、誰かと何かを約束しても、自分に都合が悪くなると黙ってそれを破り、相手を犠牲にすることも厭わないという傾向を持っています。口では守りますと言っても、色々な問題が起これば自分の都合を優先し、後になってから「この状況では仕方なかったのです」などと言い訳する。ですから私たちは互いに本当には信頼し合えない。世の中はそういう人間関係で満ちています。様々な食品偽装事件も然り。耐震偽装事件も然り。この世のサバイバルゲームを勝ち抜くためには、「誠実」や「真実」などとは言ってられない、と。いや私たちもこれらの事件を人ごとのように批判できないでしょう。私たちはいつも誠実でしょうか。都合が悪くなってウソをつくことはないのでしょうか。言葉に出して言ったことはその通りに実行しているのでしょうか。自分は本当に人が安心して信頼できるまことに真実な人間なのでしょうか。私たちはこういう社会の中で、人を信じることはできないし、自分についても確かなことは言えないと思っています。そして人は信じられないが、神様だけは信じられるなどと言う。しかしこの章が示している救いの世界は、神を信じることができると共に、私たちも互いに信じ合うことができるという世界。神に信頼すると同時に人間同志も心から信頼し合うことが可能であるということ。もしこうできたらどんなに素晴らしいことでしょうか。そしてそれは私たちが日々を生きる上でのどんなに大きな力となり、支えとなり、喜びとなるのでしょうか。私たちが召されているのは、ただ神様だけが真実ですと言って人間には一切期待しない世界ではなく、私たちも互いに真実で信頼し合うことができるという世界なのです。

そのように歩める基礎はやはり主ご自身が真実な方であられるということでしょう。23節と42節でヨナタンは繰り返し「主が私とあなたとの間の永遠の証人です。」と言っ

ています。ここにダビデとヨナタンでさえ、彼ら二人の直接的な関係だけではこの真実な関係は結べないことが示されています。単なる人間同志の関係だけでは、その関係は堅固ではない。しかし両者の間に主がいて下さるなら、相手を本当の意味で信頼することができる。これはどういう意味でしょうか。一つには相手がもしこれを守らないなら主が相手に報復されることを意味します。不誠実に対しては主がさばかれるのです。しかしここにあるのはただ脅しだけではないと思います。14節でヨナタンは「主の恵みを私に施して下さい。」と言いました。この「恵み」という言葉は「真実」という言葉と同じであると先に申し上げました。それはまた新改訳では「いつくしみ」「誠実」なども訳されていることも申し上げました。ではこの「主の真実を私に施して下さい」とはどういう意味でしょうか。ある聖書はここを「主のような確かないつくしみ」と訳しています。すなわち「主のいつくしみを反映するような確かないつくしみ」ということです。ここに人間の真実が主の真実と関係づけられています。そして主が私たちに示してくださった真実が基礎です。その主の真実・いつくしみを知っている者たちとして、私たちもその真実をお互いとの関係において映し出すようにと召されている。私たちの間でおられる主の前で、主の真実に心から感謝している者として、私たちも他者に対してそのように歩むように導かれているのです。

自らの歩みを振り返ってどうでしょうか。ダビデとヨナタンのように、互いに真実を尽くす歩みへと向かっているでしょうか。それとも真実は適当に、自分の都合によっては人を裏切る自己中心的な生活をしているでしょうか。最も身近な伴侶に対してはどうでしょうか。結婚の誓約に基づき、真実を尽くす歩みをしているでしょうか。家族に対してはどうでしょう。また兄弟姉妹に対して、またあらゆる人々に対してどうでしょうか。

「私たちは真実ではないが、神は真実である」と言って、自分の不真実を肯定して生きるのがキリスト教ではありません。このダビデとヨナタンの姿を通して私たちが持つべきビジョンは、私たちもまた互いに真実な歩みをする者になることができるということ。真実な主に導かれて互いに信頼し合う慰めと喜びに生きることができるということ。そこに私たちの友情は美しく輝くことになるのです。このビジョンの前で自らの姿を振り返って悔い改め、真実な歩みをする者となることができるように祈りたいと思います。そしてこの地上で様々な困難や悲しみに囲まれる中で、神に信頼するとともに互いにも信頼して、神の導きによるこの素晴らしい祝福の中に歩ませていただく者たちでありた

く思います。